

前書き	1
この本の作成プロセス：科学的方法の言語学への適用	1
日本語の「曖昧さ」vs 英語の「明確さ」：冠詞の影響	3
冠詞の機能の概略	4
本書で提供する指導	8
本シリーズの一巻として：冠詞用法に必要とされる特殊な扱い方	9
パート I 冠詞用法の基礎	11
Chapter 1 序論	13
1.1 名詞とその意味	13
1.2 ターゲット・オーディエンス	17
Chapter 2 算性	
——可算名詞か不可算名詞か：	
名詞の意味する物に境界があるかどうか	21
2.1 序論	21
2.2 可算・不可算物、可算・不可算名詞の定義	21
Chapter 3 同定性	
——可同定名詞か不可同定名詞か：	
名詞の意味する物は言及対象として同定できるか	27
3.1 序論	27
3.2 可同定・不可同定名詞の定義	27
Chapter 4 冠詞用法の基本ルール	35
4.1 ルールの提示	35
4.2 パート I のまとめ	35
パート II 基本的概念の解明	37
Chapter 5 算性	39
5.1 最も単純な区別：物体 vs 物質	39

5.2	日常的な理解 ——sand, trash など、物が普段どのように見えるか、どのように扱われるか ...	41
5.3	算性は名詞の使い方による ——an apple vs apple, soils vs soil など、「一まとまり」vs それを構成する「内容」.....	42
5.4	根本的な違い：実現した形態 vs 潜在的な形態	45
5.5	外在的な境界による可算性 ——the water in this cup など、外から「内容」に境界を与えて「一まとまり」を作る	48
5.6	境界が具体的に認識できることは不必要 ——a rainbow, a dream など、曖昧さなく一まとまりとして想像さえできれば、可算物	56
5.7	境界が不明確な場合 ——luggage, furniture など、境界をどこに引けばよいか曖昧であれば、不可算物	58

Chapter 6 同定性 61

6.1	同定性と受け手が持つ情報 ——名詞の意味する範囲	61
6.2	同定性と送り手が持つ意図 ——言及対象とそれについて与えようとする認識	71
6.3	二種類の不可同定名詞 ——「不特定の物」と「指し示されていない特定の物」はいずれも不可同定物	76
6.4	予備知識に影響を与える要因 ——予備情報も名詞の意味する範囲を狭める	78
6.5	複数形名詞と不可算名詞：二種の「包括性」 ——「一部残らず」と「全体として」.....	82
6.6	主部と述部の相互の情動的独立性 ——誤った「the」が循環論法をもたらす場合	88

パート III 算性の誤った用例に基づく扱い 95

Chapter 7 名詞が表す意味の一般性

——より一般的→不可算、より特殊的→可算、という傾向 97

7.1	序論	97
-----	----------	----

7.2	物質	99
7.3	情報	103
7.4	現象と状態	107
7.5	知的構築	114

Chapter 8 明確な境界 vs 不明確な境界

——不明確な境界は「一まとまり」を作らない 125

8.1	序論	125
8.2	数学的・理論の対象	127
8.3	論理的構築 vs 論理的内容 I	133
8.4	論理的構築 vs 論理的内容 II	136

Chapter 9 行為や過程の「全体」vs「内容」

——開始点と終了点を含むか 139

9.1	序論	139
9.2	誤用例	140

Chapter 10 実際の物質 vs 物質の種類

——種類自体は「一まとまり」となる 145

10.1	序論	145
10.2	誤用例	148

パート IV 同定性の誤った用例に基づく扱い 151

Chapter 11 可同定化された vs 明示的に特定された

——具体的に「何か」または「誰か」を明示しなくても名詞は可同定化され得る 153

11.1	序論	153
11.2	誤用例	154

Chapter 12 受け手が現行情報の十分さを知らない場合

——受け手が自分の持っている情報の十分さを知らなくても名詞は可同定化され得る 157

12.1	現行情報の十分さが送り手にのみ知られている場合	158
12.2	現行情報の十分さが送り手にも知られていない場合	161

Chapter 13	階層的な現行状況	
	——可同定物が不可同定物に属する場合	163
13.1	序論	163
13.2	誤用例	165
Chapter 14	限定修飾語句 vs 非限定修飾語句	
	——限定・非限定：名詞の意味を狭める・狭めない、コンマに挟 まれない・挟まれる	169
14.1	序論	169
14.2	誤用例	171
Chapter 15	現行情報が不十分な場合	
	——「意味する範囲が狭められたこと」≠「名詞が可同定化され たこと」	175
15.1	序論	175
15.2	誤用例	176
Chapter 16	複数形名詞と本来不可算的名詞の同定性	
	——「全ての」といった意味が含まれているか	189
16.1	序論	189
16.2	誤用例 I: より分かりやすい場合	190
16.3	誤用例 II: より分かりにくい場合	195
Chapter 17	文脈の役割	
	——コミュニケーション中の名詞が表す意味はまずその文脈の影 響を受ける	205
17.1	序論	205
17.2	誤用例	206
Chapter 18	カテゴリー	
	——名詞の最大実現に当たる物	213
18.1	序論	213
18.2	誤用例	218

Chapter 19	名詞が常に可同定となる用法	
	——唯一性が必ず伴う名詞や用法	227
19.1	「普通の物」を表す名詞	227
19.2	普遍体を表す名詞	231
19.3	理想形を表す名詞との冠詞用法	235
Chapter 20	英文における情報構造	
	——現行情報に入る情報と入らない情報	241
20.1	序論	241
20.2	誤用例	244
Appendix A	「countability」と「identifiability」の和訳 ..	249
A.1	「countability」	249
A.2	「identifiability」	250
Appendix B	冠詞が不要な特例	251
B.1	冠詞を取らない名詞	251
B.2	冠詞を不要とする修飾語句	253
Appendix C	呼称	255
C.1	序論	255
C.2	呼称に冠詞が付く場合	256
C.3	普通名詞が呼称として用いられる場合	258
Appendix D	量	261
D.1	序論	261
D.2	量の算性	261
D.3	量の値を示す表現における冠詞用法	264
Appendix E	特別なケース	281
E.1	「same」との併用	281
E.2	「one of」、「any of」、「some of」などの後の冠詞用法	282
E.3	「type of」、「kind of」、「class of」などとの冠詞用法	284
E.4	冠詞の暗示的な繰り返しを含む構造	288
E.5	題名での冠詞用法	289

E.6 「a few」.....	290
E.7 省略された名詞に付く「the」.....	290
Appendix F 「名詞」の定義	293
F.1 序論	293
F.2 定義	294
F.3 名詞を識別する判定法	295
Appendix G 名詞が表す意味の範疇および物の範疇	303
G.1 序論	303
G.2 抽象度による分類	304
G.3 算性、同定性との関係	307
G.4 物の形態と「完全」な分類	308
索引	311